

## 一般演題（ポスター） 閲覧 / 口腔機能

2019/06/07 09:00~17:00 ｽﾀ-会場 展示棟 1F 展示室1

**[P一般-007] 09:00~17:00****回復期リハビリテーション病棟入棟時における脳血管疾患と運動器疾患の口腔機能評価**

[筆頭著者] 関本 愉 (藤田保健衛生大学医学部歯科・口腔外科学講座)

**[共著者]**

松尾 浩一郎 (藤田保健衛生大学医学部歯科・口腔外科学講座)

大島 南海 (藤田保健衛生大学医学部歯科・口腔外科学講座)

岡本 美英子 (藤田保健衛生大学医学部歯科・口腔外科学講座)

長島 有毅 (藤田医科大学医学部リハビリテーション医学 I 講座)

柴田 斉子 (藤田医科大学医学部リハビリテーション医学 I 講座)

【目的】今回われわれは、回復期リハビリテーション病棟（回復期病棟）入棟時における脳血管疾患患者（脳血管群）と運動器疾患患者（運動器群）の口腔機能について調査した。

藤田医科大学倫理審査委員会 承認番号 HM18-026

【方法】当院回復期病棟入棟者のうち、研究に同意を得られた脳血管疾患患者（脳血管群）90名、運動器疾患患者（運動器群）44名を対象とした。口腔機能低下症に関する7項目を測定し（口腔衛生状態、口腔乾燥、咬合力、舌口唇運動機能、舌圧、咀嚼機能、嚥下機能）、3項目以上が診断基準に該当した場合に、口腔機能低下症と定義した。ADLは、機能的自立評価の運動項目（FIM）にて評価した。両群間での口腔機能の平均値と口腔機能低下症の該当者率を比較した。また、FIMと口腔機能との相関も検討した。

【結果と考察】口腔衛生状態は脳血管群で有意に高値を示した。一方、舌口唇運動機能は3音節ともに脳血管群で有意に低下していた。舌圧と咬合力も脳血管群で低下傾向を示したが、統計学的有意差はなかった。口腔機能低下症の該当者は、脳血管群で44名（48.9%）、運動器群で18名（40.9%）であった。7項目の評価が可能だった者は、脳血管群で42名（46.7%）、運動器群では32名（72.8%）だった。FIMは、脳血管群では舌圧、咬合力、舌口唇運動機能と中等度の相関を認めた一方、運動器群では咀嚼機能とのみ有意な相関を認めた。

回復期病棟における脳血管疾患患者は、運動器疾患患者と比較して口腔機能が低下傾向にあることが明らかになった。また、ADL低下と口腔機能低下との関連性も示唆された。一方、回復期入棟患者では口腔機能低下症の評価が困難であることも考えられた。